

# 座談会 2018

## 20代の保育者だった頃を 振り返る

入江礼子  
向山陽子  
飯利美知子  
嶺村法子  
(聞き手・浜口順子)

浜口 まずは、自己紹介と、四十四年前の座談会（この後の18〜21ページに一部転載）を読まれての感想や印象を一緒に。それでは当事の座談会に参加されているお二人から。

### 自己紹介と感想

入江 幼稚園の経験は、大学院のときに一年、向山さんと同じ私立幼稚園に就職し、後はずっと下って、五十歳から五十五歳まで大学の

付属園の園長職を五年です。その間は、主婦や大学教員など。これを読んで、自分が話した部分を探すのが大変でした。みんな幼稚園の先生をしているのだから、もつと子どものこととかいっぱい出てきそうなのに、そうじゃなくてずいぶん自分のことを語っているなと思いました。

向山 私は、大学を卒業してから、私立幼稚園で教諭、園長として、約三十六年。保育者養成校に非常勤で約二十五年。オランダでは、日本語幼稚園を手伝いながら、今でいう子育て支援グループを立ち上げました。現在は、養成校非常勤講師と某大学大学院博士課程に在籍して、保育史にはまっています。四十四年前当時は……子どもと一緒にいることの魅力をすっごく感じながら、のめり込んでいく怖さも感じていて、先輩方が現場を語る姿を不思議な感じで聴いていたのを覚えています。

入江 自意識過剰かもしれない。自分のこと

入江礼子（共立女子大学家政学部児童学科教授）  
飯利美知子（公立幼稚園特別支援教育補佐員）

向山陽子（元私立幼稚園園長、大学非常勤講師、学生）  
嶺村法子（公立幼稚園園長）

ばかり考えていた。教師という意識もほとんどなく、子どもと一緒にいる人という感じだったなと思います。

**嶺村** 私は、大学院を出て、国立の盲学校幼稚園と都立の特別支援学校高等部で、産育休代替えとして一年ずつ勤務した後、平成元年から公立幼稚園で担任を十六年間やりました。そのうちの二年間は育休を取っているんですけど。その後、三年刻みで主任、教頭を経験し、園長は七年目になります。

**向山** そういえば私、ブランクが十年あります。

**入江** 私もブランクは十五年くらい。でもその間、保育と一緒に学んだ仲間と連絡を取りあっていました。

**浜口** やはり女性は、キャリアが複雑になりやすいですね。

**嶺村** 昔の座談会で、何事かに一生懸命取り組むとか、先ほども、のめり込むのが怖かつ

たというお話がありましたけど、今、若手を育成する立場になって、むしろ無我夢中に髪振り乱して、なりふり構わずに、がむしゃらにやろうよ保育、と言っている自分がいます。子どもと一緒にここで生活をするんだよ、という話をしたり。葛藤があつて当然の二十代なのかなあ、と。

先日、三十周年の同期会があつて、新卒二か月目で書いたレポートをコピーして持ってきてくれた人がいて。それを読んだら、昨日書いたのになつて思うぐらい、ベースにある考え方は変わっていません。びっくりしました。だから、当時の方々は、保育を志した頃とどういうふうに変わったのか、変わっていないのか、知りたい気がします。

**飯利** 私は短大を出て、千葉の私立幼稚園で八年というところから始まって、その後、子育てでちょっと抜けたり、千葉から茨城に引っ越してまた復帰したりして、ざっくり数え

ると、夫にはジブシーみたいと言われるんですけど、今の園で、幼稚園と保育園を八つ渡り歩いたという感じなんです。というのは、最初の幼稚園が遊びを大事にする保育だったのでとても楽しくやれたんですけれども、引越した街ではそういう保育の場がなくて、「ここじゃない、ここじゃない」と、そういう思いで渡り歩きました。今は、公立幼稚園の補佐員として特別支援児の担当をして三年目になります。座談会記事を読んで印象的だったのは、「幼稚園で生きる」というところ。それから、つらくなって辞めようかと思ったけれども、それを乗り越えたときの楽しさがあったところ。私もそういうものがあったから、いまだにこの世界にいるのかなあとあらためて感じた、というのが感想です。

## 結婚か仕事か？

浜口 当事者の方々と後から読んだ方とは

印象が違うようですね。

**入江** ここには書かれてないんですけど、最初の一年というのはすべての基礎になっていて、今でもその頃の記録を読むと、本質は何も変わってないと思います。

もちろん、若かったし、結婚する前で、私の場合は、結婚しなきゃとか、できるんだらうかとか、そういうものも一緒にありながらでした。子どもといると面白かったけれど、幼稚園の先生としては失格かな。お遊戯会で、クラスで浦島太郎をやることになったんです。一年目で保育技術も何もあったものではなかったで、結果的に無理にやらせるみたいになっちゃって。それは自分が保育で大切にしていたことと真反対だったわけです。それで幼稚園に行けなくなったの。



▲入江礼子氏

十日間くらい休んで、お遊戯会は欠席というありさまでした。

## 結婚、子育て、ブランク

**浜口** 当時の二十代の女性の結婚・子育てへの思いは、今と違うかも。

**入江** あまり仕事って思わなかったよね。

**向山** 私も夫の転勤について行ったり。仕事するしないも、夫と子どもで決まってくる世代なのかな？

**飯利** 私、入江さんと六歳くらい違いますね？私は結婚とか考えないで、できることならこの道でどっぷり生きようかと思っていたときもありました。結局は結婚したんですけど、そういう人がちらほら出てきていた。三年たったとき、この仕事に向いてないと思って、子どもたちのためにも辞めたほうがいいなんて考えたこともありました。でも、それを越えたらだんだん面白くなってきて、五年くら

いのときに、この道でいいのかな、という感じで。

**浜口** お子さんができて辞めた？

**飯利** 年子で二人。子どもは三人になって、また

保育の場に出るまでに、コンビニで働いたり、発掘の調査員をしたり、役場のレセプト処理をやったりしたんですけど、子どもと一緒に過ごす保育の仕事が忘れられなくて。末の子が小学校三年になったとき、もう一度フルタイムで働けるかなと思って、保育園に入って、また始めました。

**向山** 私にとっても一、二年目は根っこになっていきます。年中組四十人の中、障害のあるお子さんが六人。「統合保育」と、山と海で育てる方針。毎日のように海や山へ行き、がけをはい登ると海が見える。私は子ども時代にも遊んで育ってないから、初体験ばかり。一年



▲飯利美知子氏

で辞めるんですけど、自然体験と一人ひとりの子どもへの視点は私の基本になった。次の園でも、蛇口から流れる水を見つめて過ごすお子さんの担当になって、水は面白いと頭ではわかるけれど、何をすればよいのかわからない。傍にいたるしかなかった。ブランク中に恩師や先輩方に導かれた保健所心理相談員、国立盲学校幼稚部産休代替教諭、『幼児の教育』の編集担当、音楽会司会の体験が、根っこに上書きされて園長職の力になりました。

## 夏季休暇

**浜口** 座談会では、夏休みが大きな区切りになっています。昔は、子どもと同様、長い夏休みが先生にもあったんですね。

**向山** 変わる頃のこと、覚えてます。国公立は夏休みがなくなるんだ、私立はどうしょうって。

**嶺村** 公立幼稚園では、一九九〇年代に第二・

第四土曜日が休みになったとき、出勤する土曜日が、年に十日程度はありました。だから、それを夏季休業中にまとめ取りして、プラス五日間の夏季休暇を取って、さらに年休を使えば、ある程度まとまった休みが取れていた。自宅研修も認められていたので、自宅で教材研究をしたり、外部の研修を受けに行ったり。座談会の中にも、幼稚園のことを忘れて、子どもの名前まで忘れて、というくだりがありますが、私も、子どもが小さいときは、毎年帰省して田舎でのんびりしていた。夏休みの変化は大きいですね。

**向山** 夏季休業中を含めて、預かり保育に補助金がついたのね。私立幼稚園の園長として、先生方の夏休みの確保と預かり保育の運営の決断に勇気がいったと覚えています。

**飯利** 今は幼稚園が預かり保育をしていないと子どもが来ない時代です。夏休み中も預かってますよね。お盆しか休みがなくて。私が

若い頃は、すつぱり休めていた。今は私立幼稚園もそんな感じですよ。

## メリハリ、外の世界

**嶺村** 以前は、知らず知らずにメリハリをつけられるような仕組みがあつたように思う。今は自分でメリハリをつけないと、生活も仕事もズルズルしてしまうのかな、と。子どもがけがをしないように見ていれればいい、一生懸命やつてもお給料は同じだから、というのは困るんだけど、どつぷり仕事だけというの。

**向山** 自分からエネルギーをもらいに行く場が外にあつたり、自分たちでつくつたりして、「ねばならぬ」時間と使い分けてたわね。

**嶺村** 今は、100%注ぎ込まないと追いつかないぐらいの「ねばならない」研修がある。学ぶ機会が保障されていることはありがたいけれど、日々は日々であるし、夏は夏でまと

めてあるし。緩急とかメリハリとか、一日の保育を組み立てるといふのは、自分の計画に子どもを入れ込むことではなく、子どもとの生活を一緒につくっていくことですよね。若かりし頃、私も難しかったと思うんですけど。自分で、夏はこの研究会に行こうとか、リフレッシュしようとか、一日一年を組み立てるっていうか。そういうことを自分でマネジメントする力って、仕事も生活もつながっているような気がします。

**浜口** 小学校は、始めから授業で区切りがついていますものね。組み立てていっても四十五分。幼稚園や保育園は、長いから。メリハリがわかってくるのは、あれはキャリアなの？ 一年目はとても無理？

**嶺村** キャーとか、ワーとか言ってたような気がするけど。今の人はそうでもない。淡々と落ち着いてやっていて。

**飯利** そうそう。

**嶺村** 心の中では動揺したり焦ったりしているのかもしれないけど、淡々とやっているように見える。自分の生きざま、何を大事にしているか、どんなふうにと子どもたちと一緒に生活をつくっていくか、と思っているかは、そのまま保育に出ちゃうから、淡々と保育しているのって何なのか、どうアドバイスすればいいのか難しい。だからといってキャリアを重ねればいいのかというわけではなく、若くてもできちゃう人はできちゃうし。その不思議さを感じますよね。

**飯利** 若い人たちを目の前にして、老婆心としてなんとかしてあげたいと思うんです。保育は苦しいけれど楽しいこともあるんだよとか、こういうところを見るといいとか。でも、具体的なことをどうやって伝えたらいいのかわからない。

## 最近の学生は担任を持ちたがらない

**向山** 誰かに助けてもらおうとは思わなかった。先輩からの一言がうれしく、力になったことはあるけど、私の保育の悩みは他の人にはわかんないって思ってたかな。

**入江** 自分の責任とまではいかなかったも、自分でやるものと思っていたから。今、幼稚園で一人で担任するの、怖いっていう学生が多いですよ。

**飯利** だから保育園がいいと思うのですね。  
**嶺村** それが楽しいっていうのが、どうしてもわからないのかなあ。

**入江** 担任やりたいたって思ったわよね。

**向山** 園長を辞めて三歳の担任をしたいと言って、大笑いされた。今でも担任したい。(笑)



入江 実習では、こういうふうにしたいなと思っても先生の言う通りじゃない？ 絶対担任を持ちたいと思った。

浜口 なんて、やりたくないって思うのかしら？

入江 大変だからっていうのと、それからもしかしたら子どもが面白いって思っていないのかな。

嶺村 実習体験がよくないのかも。厳しく指導され過ぎると立ち直れないことに。

向山 特に幼稚園、多いって聞きます。

嶺村 幼稚園実習に行つて、やっぱり幼稚園って楽しいなつて。私も子どもと一緒に生活したいと思つて帰るような、そういう実習じゃないと。

入江 そうよね。そうあつてほしいです。

嶺村 でも、学校で学んでくる保育の基本と、実際に幼稚園でやっている保育の形態や生活がかけ離れ過ぎて、そのギャップに自分が苦

しんで、だったらもう、つて感じになるんじゃないですか。

## 一年目の壁

浜口 学校で学んできたことが、すぐ、一年目でどこか横に行つち

やつて、ということもあるんですね。

嶺村 園のやり方になじんでいくのに精いっぱい。思いはあつても実践がついていかないから、求められるものとのギャップが埋められない感じ。

入江 浦島太郎の劇のときも、他の先生に助けてもらうという考えが浮かばなかった。担任だから一人でやらなきゃつて。

嶺村 私も浦島太郎だった。主任さんが、あなたそこで見てなさいつて。こうやつてやるのよつて。呆然として見てた。







**浜口** 行事は、一年目には難関のようですね。自分は自分らしくやるぞ、みたいには思えなかったですか？

**向山** ていうか、自分の力量でしかできないわけで、それはとんでもなく未熟で……。

**飯利** 昔の座談会に、今までは自分が出せてなかったけど、だんだんと自分らしさで「ありのままとまでいなくても、わりと自分らしくいられる、……」とあって（本誌18ページ参照）、私もこれが保育の仕事続ける基かなという感じがするんですね。一年目は、ちゃんとやらなくちゃという感じで、無我夢

中で。それって自分らしくなかった。それがあの頃、キリスト教保育の夏の講習とかに行くと、「自分らしく」とか「保育の中で自己表現」とかの言葉があ

ちこちから入ってきて、保育の中で自分を表現していくってすごい仕事だなんて思えた。それで、ああかな……こうかな……とやっていくうちに、すごく保育になじんでいったのかな。ここじゃない、と思いつながら幼稚園や保育園を渡り歩いて、その後今の幼稚園に入ったとき、子どもたちが自分のやりたいことをのびのびとやっている雰囲気、私が開放されたような感じがしてホッとしました。若い先生たちが、そういうふうに思いながらこの仕事ができるといいのですけれど。なかなか、難しいですよ。

### みんなが自分らしさを感じる環境

**浜口** 園長としては、自分らしくみんなが思える環境ってどうやってつくる？

**嶺村** 私はやりたいようにやらせてもらってきたように思うけど、今、先生たちにはなかなか「好きなようにしていいよ」とは言えな

い。担任六人のうち四人が本園が初任で、育てなきゃという気持ちがある。

私、一年目に年長を持ったとき、子どもたちと園庭で鬼ごっこをしていて主任さんに褒められたんですよ。年中のときは誘っても走ったりする子たちじゃなかったのに、楽しそうに走っている。「あなた、大したものね」と。他に覚えているのは、先輩たちが土作りをしているところに私が後から歩いて向かっていたら、「そういうときは走るのー」って言われたこと。新採研に出かけて帰ってきたら、せっけん箱がきれいに洗われていて、保育室のレイアウトが変わっていたこと。今でも鮮明によみがえってくるくらいベースになっている。そういうふうにして後進を育てたいという気持ちはある。だから、その人が得意なことは頼りにしたり任せたりしているけど、製作なんかの場面では、「どうして紙をきちんと折らないかな」とか「この色の組み合わせ、

もつと感性磨こうよ」とか言っちゃうの。言うだけでなくやって見せる。気がついたことはその時に伝えないと忘れちゃって、後で「あーあ」ってことになっちゃうから。それを言ってもらってありがたいと思っているのか、うるさい園長だと思っているのか、今に見ておれ、と思っているのか、皆さんがどう思っているのかわからない。でも私は私のやり方でやるしかないし、その中でその人らしくのびのびとやってほしいと思っているけれど、毎日きゅつと心臓をつかまれるような思いをしている人が、中にはいるかもしれない。

**浜口** 園長という仕事はなかなか厳しそう。向山さんはどうでした？

**向山** 私にとってはやりがい？ でも、昔、園児数二十六名の園の存続をかけた変革のときは、先生方を勢いに巻き込み、「今のあなたは私が知ってるあなたじゃない」と友に諭され、その膝で泣いた（笑）。今なら「改革は急

に、変革はゆつくり」と言えるけど、当時は、子どもたちに申し訳なくて急いでたね。

**浜口** 若い保育者たちから蔭で文句を言われているというようなことは、やはり感じたの？ そういうこともあり、ということ？

**向山** あり、あり。しょうがない。園長は孤獨なもの。子どもたちの顔がどんどん変わってきたら、園児数が増えたらわかってくれるかな、と思ってた。それぞれの先生の得意を生かすことには努めたつもりだけど、丁寧に育てる余裕はなかった。次の園では少しは成長できたかな？（笑）今、わが子の育ちを報告してくださったり、保育者、研究者、地域の子育て支援の要としてなど、それぞれがその人らしく生き生きとされている姿を見ると、すっこくうれしい。

褒めるって、叱るって

**向山** 褒めてもらいたいと言われたことがあ

る。認められていることはわかるけど、と。その人のやりたい保育を具体的にサポートしたり、保護者会や外では先生たちを褒めただけ、本人には褒めてない。職人のように見て学べとか、厳しくおおらかに、では通じなかったかな……。

**飯利** 私の立場から園長先生を見てみると、先生たちも子どもと一緒に思う。先生にも、「ずっと見てたよ」とか声をかけてほしい。そんな園長先生と先生の関係も大事なって。大人同士だとあまり意識されないうんだけど、ここで一言あると、この先生、明日につながるかな、先生たちの元気にもなるのかなと思うことがあります。

**嶺村** 週案に励ましたり期待したりする言葉を入れたりするけど、決定的に足りないんだと思います、褒めるってこと。



▲嶺村法子氏

なるべく意識して「よかったんじゃない」って言うようにしているけど、どうしても、「あのさあ」って言ってしまふ。

**飯利** それも必要ですよね。

**嶺村** 五年十年続けていって、立場が主任や管理職になったときに、若い頃に園長に言われたわよ、ということがどこに残っていればいいのか。保育の心というか、そういうものをどうやって体現していくかというのは、昔のように、先輩から盗みなさいとか、背中を見て学びなさいとか言わないけれども、やっぱり自分が子どもにかかわる姿とか、私がこだわっていることとか、そういうことから、なんでそこにこだわるのかとか、なんでこんなにガミガミ言うのかというところを、「なんで」というところを聞いてね、と言っている。聞いてくれれば、そうした理由なり根拠なりを答えるから、と。それを感じてほしいなというのはあります。

## 若い人に一言

**浜口** 最後に、まだ二、

三年目ぐらいの保育者に、

それぞれお言葉を。(笑)

**向山** 四月一日勤務初日



▲向山陽子氏

に、この園のここがおかしいと今思っていることを忘れないでねと言ってきた。三年、五年たったら変えられるかもしれない、それがあなたらしさ、園にとっても宝だからねって。染まつちやうと軸自体がずれちゃうから、と。

**飯利** 保育の中で、一日に一つでも、気がついたこと、感じたこと、注意されたり失敗したりしたこととか、自分の中にすく入り込むことがあると思う。そういうことを、大切に丁寧に積み重ねていくことが、先の自分に必ずつながるから、一日一日を積み重ねる保育をしてほしいなと思います。

**嶺村** 本気で遊んでくれる先生が、その子に

とってうれしい先生だよと言っている。うれしいって感じることを、その子が感じるタイミングでできる、うれしい先生になってね、と。そのためには思いきり一緒に遊ぶこと。指導しようとか教えようとかの前に、まずは汗を流して一緒に遊ぼうよ、って。その中で、子どもが教えてくれることを拾い集め、自分から学んでいくことが大事だし、それを自分の喜びに変えていける人が保育者なんじゃないかなと。

入江 卒業生がいろいろな保育現場に出ていきます。その学生たちが、今、こんな保育をしたいなっていることを忘れないでほしいなと思っています。それは保育力もいることだから、すぐには実現できないと思うの。けれど頑張つて、ここでできそうと思ったら少しずつやっていくとか。自分が大事だなと思っている光のようなことを忘れないでもってほしいなと思います。

浜口 若気の至りも大事。

(二〇一七年十一月十日)

